河上肇記念会報

No. 1
1975.12

〒530 大阪市北区梅ケ枝町一九九（星光ビル）
菅原法律事務所内 河上肇記念会
電話（〇六）三六四ー六七七一
振替口座 大阪 三一三一九五

会報の創刊に当って

末川 博

河上肇の人となりを追慕したりその業績を研究したりする集まりは、東京でも関西でもいろいろあるのだが、いわば恒久的にかつ定例的に継続されているものには東京河上会と京都大学の河上祭があり、とくに東京河上会では長いあいだ会報を刊行して、時どきの会合の模様や会員の消息だけではなく、河上に関する新しい研究の成果や資料なども掲載されている。そして関西でもこれまで河上の命日を中心に毎年のように会合を催してきていたが、諸般の事情のためにととのった組織はできていなかった。ところが、一九七二年六月に京都府立総合資料館で河上肇遺品展が開かれたのを機会に、全国的に河上にゆかりのある各方面の人びとにより河上肇記念会が結成されるに至った。もっとも、この遺品展は、一九六九年に出来た河上肇博士遺品保存委員会によって収集されたものを基盤として開催されたのであり、それが出発点となって河上肇記念会が発展してきたのだといえるであろうが、そのような経緯については、本紙に収められている諸氏の論稿で詳しく述べられているからここでは省略する。

こうして、河上をめぐって東京の河上会と関西の河上肇記念会が併立することになったのであるが、両者は、会員が互いに入り乱れていることによっても明かなように、相互に協力し提携しあっていくいわば兄弟の会であって、こんど発刊することになったこの会報も、東京河上会会報と共に河上について関心を有しておられる諸兄姉自身の連絡や対話の場として、また最近若い研究者のあいだで盛りあがってきた河上研究のための資料や手引きを提供する場としても活用されるであろうことを期待し希望しているのである。

「河上肇記念会」由来

小泉仁一郎
大門英太郎

『・・わが河上肇記念会が昨年京都に於て河上肇遺品展、記念講演会、記念集会等々を開催しました際には、幸にして各位の多大の関心を呼び、御協力を頂戴いたすと共に、之を機会に河上先生の遺業を中心に皆様とゆかりの出来ました事を心から喜ぶものであります。

この度京都府立総合資料館との共同編集による「河上肇遺品展図録」並に京都大学経済学会「経済論叢」の好意による記念講演会内容「抜刷」の出版を機に、折角の各位とのゆかりを更に確かなものとするために、是非河上肇記念会に会員として入会下さる様お願い申し上げます。

もとより史上にもまれなユニークな存在である河上肇先生を敬慕する事の意義を認めるほか、何等他意のない会でございます。

振って御入会下さる様願い上げます。

昭和四十八年十月　日

河上肇記念会

世話人代表　末川　博

世話人（順不同）

石川興二　住谷悦二
大野英二　出口勇蔵
古林喜楽　寿岳文章
松田道雄　天野敬太郎
藤田敬三　福井孝治
菅原昌人　大塚有章
田中米一　服部周平
小泉民治　安井　功
川勝　伝　相沢秀一
小泉仁一郎　芝　春雄
大門英太郎

会　則

河上肇記念会は河上肇先生の人格と業績を讃え、之を広く永く伝えるために、研究、事業を行う。

適時世話人に於て、東京河上会と連繋を保ちつつ、会員間の連絡にあたり、年一回総会を京都に於て開催する他、その他の集会、事業を行う。

この会の経費は会費及び寄附金を以て当て、会計報告は総会に報告し承認を得るものとする。会費は年額　金千二百円也　とする。

以　上』

わが「河上肇記念会」がボランティア的世話人が集り、会則を定め会員を募って恒久的組織として発足したのはこの時に始る。

ここに至るまでの経過を簡単に申し述べるならば、

昭和四六年末、東京河上会の総会の席上、去る四四年設立された「河上肇博士遺品保存委員会」の締めくくりの意味もあり京都で河上肇遺品展を開催しようとの議が提案され、関西から出席した小泉仁一郎が万般の準備を托されて帰落、早速小泉を中心に京阪在住の世話人によって六月頃を期して開催する事を決定。この行事の開催についてはその主催者の名称を「河上肇記念会」とし、とりあえず事務所を大阪の菅原昌人法律事務所におき、末川博を世話人代表として直ちに資料の収集、資金の募集にとりかかった。

古くは河上肇博士歌碑建立会から河上肇会（石川興二代表）、河上肇著作集刊行記念会、東京河上会、河上肇遺品保存委員会、京大白河会、洛友会等々の名簿を拾い、かつ京都大学経済学部、経済学会を通じて京都大学の協力をも乞うて広く訴えた所、予想以上の反響を得る事が出来た。東京に於いては、東京河上会の田中、白石、内田、小林（直衛）、及び京大白川会の野口等が中心となり、関西に於ては末川、住谷、藤田、福井、菅原、小泉、芝、大門等が準備に奔走。展示会の出展品については東京河上会、関西に於いては、この展示会の中核をなす住谷同志社総長の所蔵を数ヵ月に亘って小泉民治が整理したのを初め、京都大学経済学部の河上文庫、末川、羽村両家の所蔵、其他世話人達が各々資料の所在を

つきとめ足を以て蒐集にあたり、その質と量はほぼその望ましい域に達した。

資金の方は一口二千円也の協力を一七〇数口、他に奉賀帖を以て足で集めた募金（藤田敬三指揮）八五万円、他に会員服部のボスター、ビラ等の寄贈を得た。会場の設営、陳列については、天野、住谷、福井、大野等の意見を採り入れつつ総合資料館館長以下全員の心からの協力と奉仕を得て、完全なものとする事が出来た。更に京都大学経済学会の協力を得て資料館講堂に於て記念講演会を開く事に相成った。結局次の様な日程によって行事は進行したのであるが何れも予想外の盛況で、之に関する諸新聞の報道と相俟って、当時京都に河上ブームを捲き起す事となった。

○河上肇遺品展　六月一日～四日　河上肇記念会と京都府立総合資料館共催

○記念講演会　六月三日午後、河上肇記念会と京都大学経済学会共催

○記念晩餐会　六月三日夜　於藤屋旅館宴会場、約七十名出席、京大白川会と共催

さて、次いで資料館に於ける河上肇遺品展の全容について田中米一館長初め荒尾利就氏、太田至郎氏他全館員の努力によって刻明な記録と写真を整えて下さったので之を死蔵するに忍びず、河上肇記念会と京都府立総合資料館の共同編集として出版する事になり、田中館長、太田、安部両館員、当会小泉民治が献身的に事を運び、天野、大野、住谷等々のアドバイスを容れつつ苦心の末日本写真印刷株式会社に命じて四八年六月（発行日付は三月末）見事刊行する事が出来た。（千五百部）

同時に京都大学経済学会の好意によりその機関紙「経済論叢」（昭和四七年九・一〇月号）の中、記念講演会の全容の「抜刷」を出版、資料館の方はその独自の立場から「図録」の頒布にあたられ、記念会は前年の催しに協力して下さった各位にもらさず贈呈するとともに、各新聞社の文芸部、近隣の公共団体等に寄贈した。

そしてこれを機会に冒頭の様な文書を以て記念会の組織的発足を企てたのである。

其後の活動について、

○一九七三年度記念集会兼総会を十一月十八日鹿谷法然院に於て開催、約七十名参集

○図録正誤表（資料館作成）の配布

○資料館河上肇文庫目録（資料館発行）、河上肇記念会寸信を発行配布

○一九七四年度総会

一九七五年一月一九日法然院にて開催約六十名出席、先生没後三十回忌法要を営んだ後、資料館を訪問、「河上文庫」を参観

× × × ×

さて、冒頭の挨拶状の世話人の所を見て頂き度い。我が記念会の中心的世話人であり、先生と特に親しかった菅原昌人、著作集刊行会以来献身的に働いて頂いた芝幸雄の両兄を失っている。哀悼にたえないが、世話人の平均的年齢を見ても、遠くない将来、没後三十年の先生のあとに続くべき運命にある。若い人々の新しい力が是非必要である。幸にして本年の総会を機に京大経済学部出身の杉山幸雄、岡村孝雄両君（河上先生の孫弟子位に当るであろう）をスタッフに迎える事が出来た。若い小泉民治、安井功両君と共に会として期待する所大である。念願の会報も今後は立派にバンクチュアリに出す事が出来るであろうし、集会其他の清新な諸企画も期して待つべきものがある。尚、世話人はあくまでボランティアであって、どうか会員諸兄姉の心からなる御協力御献身を頂きたい。

冒頭にのべたゆかりのある方々、（百数十名の会員を含めて）準会員ともいうべき方々の芳名を現在会は千二百程頂戴している。

この度の会報発行を機に更にきづなをかため度いと期している次第である。

最後に、ここに重ねて京都府立総合資料館並に京都大学経済学部、同経済学会の協力を謝し、併せて今後の御指導、御支援の程をお願いする。

河上肇記念会総会

小泉民次

冬がとこ鹿谷法然院にこもり、石だたみから冷気ふきあがる一月十九日十一時より総会が開かれた。出席者は五十五名（敬称略、末川博、羽村静子、鈴木旬子、相沢秀一、相坂邦義、天野敬太郎、井関安治、大橋隆憲、大野英二、大塚設男、大門英太郎、大月誠、岡田義雄、岡村孝雄、岡部利良、小泉仁一郎、小泉秀三郎、小泉参次、小泉民次、小椋美与士、小林寛、児玉誠、小林直衛、中村しほ、沢村秀夫、塩田庄兵衛、杉山幸雄、菅原藤子、鈴木春雄、杉原四郎、住谷悦治、槇永弘、田村敬男、千葉哲郎、寺尾善作、内藤夫妻、中村真炳、野口務、服部周平、〃同伴、広岡正次、平井重男、平井広子、福井孝治、平井俊彦、藤原昭三、藤井松一、船山信一、室万治、山下孝次郎、森田茂、安井功、山口幸一、山上輝夫）

小泉仁一郎氏の開会の挨拶があり、ついで本堂で、梶田住職もカゼを召されたとお聞きしていたのに、勤められて、法要が行われた。外は雪がちらつき始め冷えきった暗い本堂に一同頭をたれ、すみわたる読経の音に胸うたる。

続いて墓前で、末川会長の手で卒塔婆が立てられ、菅原藤子、富田健一両氏のお供え、そして山下孝次郎氏の寄贈による進々堂のパンも供えられ、遺族の羽村静子さん、鈴木旬子さん、相沢秀一氏、高弟福井孝治氏によって花束が供えられ一同黙禱。

席に戻るとこれも又山下孝治郎氏の寄贈によるお酒、塩万の品よく並んだ弁当が配膳されており一同やっと体を暖めることができた。「今日は冷る冷るとの声に司会大門英太郎氏「寒い寒いとは何ぞや、河上先生は決して寒い等とおっしゃらなかった」と叱咤のお言葉。次いで昨年亡られた会の中心的な世話人であった菅原昌人氏の黙禱（故人の大阪梅枝の事務所では、何回となく会合し相談し、その豪快さと暖かい包容力にいつも感服。葬儀でも追悼にいつも河上先生の話をされていたとの事）。続いて、鱒川知事と菅野和太郎氏の祝電を披露。更に東京河上会の白石凡氏の「河上肇全集」刊行の中間報告書簡が読みあげられた。そして末川博先生を筆頭に席順に自己紹介と一言ずつの所感をのべる。

その後三時近くになり資料館（バス（住谷悦治氏手配）で向い、休日なのに朝から二十人近くで準備して下さった資料館員方のむかえを受け、湯浅次長より病欠の館長に替り、河上肇文庫の設立等のお話を伺った。法然院に続いて自己紹介を行い、その後東京の小林直衛氏が河上肇記念会の今後の運営方法等を話された。そして待望の閲覧、大きな勉強机に多くの図書、書簡、壁には軸と、遺品展を想わせる館の御苦労に、一同深く感謝、解散五時。

河上肇記念会計理報告
―中間報告―

大門生

まことに申し訳けない次第であるが、只今収支明細を項目別に整理中であって、とりあえず現在高を報告すれば次の通りである。次の総会には詳細御報告申上げます。

記

振替口座残	二一三、八三〇
郵便預金残	八、〇二五
現金	二〇一、三七〇
切手	一、一六〇
計	四二四、三八五円
他に図録発行時	借入金（未済）
	△二五六、一三八円

『河上肇文庫』の成立ちについて

京都府立総合資料館文献第一課
植田光雄

昭和四十年代に入って、京都府立総合資料館に河上肇博士の諸資料を集めてはという声が出てきました。昭和四十四年四月には、立命館名誉総長の末川博氏が、嵯川知事に、このプランを持ち込まれ、知事も協力を約束しました。その後、河上肇記念会、京都大学経済学会、府立総合資料館が協力をして『河上肇遺品展』を昭和四十七年六月一日から四日まで開催しました。この展示会には、河上博士の著書、講義ノート、未発表の原稿、筆跡、絵画、博士の愛用品など約二百点が出品され四日間に約千四百人の人々がつめかけ、河上博士の遺徳をしのびました。

展示会終了後、出品物のうち六十三点が総合資料館に寄託されることになり、二点が寄贈されました。勿論、これらの資料が、今日の河上肇文庫のベースになっていることは、いうまでもありません。

昭和四十八年三月には、展示後も河上博士の人と業績を永く伝えるため、出品物の代表的なものを写真にとり『河上肇遺品展図録』として、河上肇記念会と共同編集し、刊行しました。

同年六月に、総合資料館では機構改革がなされました。つまり、収書・目録・閲覧という、これまで図書館でなされていた横割りの機構から、歴史・民族・芸能などの主題別縦割りの機構へと切り替えたのです。このことは、各主題の担当者の、学問的内容の専門化をおし進めるとともに、文献資料と生資料の収集・整理・利用に対する技術的合体を可能にしました。

さて、こうした新しい機構の中で『学問・文化』に関する図書文献諸資料の収集部門を設け『京都で独自の学問体系をうちたてた学者の人と思想』に関する資料を積極的に収集することにし、この第一弾として、河上肇博士の人と思想などを語る資料の収集をはかることとなり、『河上肇文庫』を設立しました。

まず、収集の手はじめは古本屋回りでした。地図を片手に、京都市内の古書店を、かれこれ九割近くは回ったでしょうか。それで、約三カ月間で、河上肇の著書を百冊ばかり集めました。もはや、書店回りでは効率が上がらない段階にきた時、生資料の複製に、収集方法を切り替えました。この河上博士の書簡や原稿などを借用し複製するために、博士の家族の方や親せきや知人のお宅を訪問し始めたことは、私にとっては、自分の運命が大きく変ったような喜びを与えてくれました。普段なら、とてもお会いできないような先生方が、暖かく迎えて下さり、喜んで資料提供をしてくださいました。また、河上博士の肉筆の書簡などを見ているうちに、本当に博士の心の暖かさに触れ、だんだん魅せられていく自分に気づきました。

昨年来に、天野敬太郎先生の監修で『河上肇文庫目録』を出版しましたが、その後も、博士の書簡など、資料提供が相ついでおり、既に文庫の資料は、千六百点に達しようとしております。今後とも、皆様方の御支援御協力をお願いします。

第二十九回目の河上祭

河上精神をしたう若い学生諸君の手で、あの京大紛争の嵐の中でもその燈を守りつづけられてきた河上祭は、今年二十九回目を迎え京大のみならずいまや京都の年中行事として定着しつつある。歴代の実行委員の名簿もしらべつつあり、いつの日かこの会報上で、来年三〇回となる河上祭小史をつづりたいものである。

（○）

河上肇全集の刊行について

杉原四郎

去る三月八日京都大学経済学部図書室で河上肇全集の第一回編集会議がひらかれた。昨年四月二八日に京都で最初の会合があり、その後も京都や東京で集まりを重ねてきたのだが、それらはいずれも河上肇著作集の増訂新版を準備するためのものであった。ところが昨年十一月十六日の東京での会合で、筑摩書房の岡山氏から、十年前に出た十二巻の著作集を四巻程度増補するという方針をすてて、量的にも倍増の二十数巻で全く新しく構成された全集の刊行という構想が出され、種々討議の結果もしそれが可能ならその方がよいだろうということになった。その後筑摩書房で検討の末、全集刊行という基本線が固まり、その線にそった最初の編集会議が三月に持たれた、という次第である。

私はかつてわが国における経済学者の著作集や全集について調べたことがあるが、その際私は、最近では文学者のみならず経済学者についても、たとえば小泉信三や河合栄治郎の場合のように、二十巻をこえる全集が刊行されるようになったのだから、河上についても著作集だけではなく、当然それをふまえた本格的な全集の出現を「今後に期待してもよいであろう」とのべた（『経済資料研究』第五号一九七二年六月、九ページ）。この期待が河上肇の生誕百年にあたる一九七九年を目標に実現されることになったことは、私の大きな喜びである。だがそれと同時に、はからずもこの大事業にあたる編集者の一人に加わったことの責任の重さを、痛感せざるをえないのである。

はじめは逝去三〇年にあたる一九七六年をめどに著作集の新版をというプランがこのようにたとえ刊行を数年のばしても本格的な全集にと変更された背景には、最近河上の講義ノート、手稿、書簡などの新資料が多数発掘されつつあるという事情がある。一九七二年六月に京都府立総合資料館でひらかれた河上肇遺品展にも羽村二喜男氏所蔵の河上のノートや手稿のいくつかが出品されて人々の注目を集めたが、大野英二教授と私がその後羽村邸にうかがって遺品を調査したところ、それ以外にも貴重な資料が、これまで全くその所在が知られていなかったものや、知られていてもその内容が公表されなかったものをふくめて、多数のこされていることが判明した。こうした資料は羽村氏の御好意で現在京大経済学部に寄託され、内藤昭子図書掛長の手で整理されつつあるのだが、過日の全集編集会議を京大でひらいたのも、われわれがこれらの中の主なものだけでも見ておきたいと思ったからであった。

当日とくに注目されたものとしては、〔一〕宗教に関する覚書」という獄中で書かれたノートや、「河上肇論文集」として自作の雑誌論文の切抜きをあつめたものの最後に挿入されている Mao Tse-tung と題された和文英文二様の書き抜きノートがある。これらの執筆時期や内容については今後の検討にまたなければならないが、こうした新資料の成果が今度の全集に十分もりこまれるべきことは、いうまでもないであろう。京都府立総合資料館にある親友小島祐馬や伊藤祐之やにあてた河上肇の多くの書簡、最近新資料を加えた増補版が出された『河上肇の櫛田民蔵への手紙』（一九七四年、法政大学出版局）など、これらの資料や今後発掘蒐集されるべきものによって全集というものの最大の魅力である書簡の部の充実をはかることもまた、われわれにとって大きな課題となるであろう。

編集会議では、〔一〕収録範囲、〔二〕編別構成、

㈢校訂・解説、㈣作業分担などについて検討された。㈠については、全集である以上生前公刊された著作をできるだけ網羅することはいうまでもないが、河上の研究・著作活動の重要な領域であった翻訳をどうするかが問題となろう。翻訳の収録は小泉信三全集のような先例もあり、河上自身にとってまたわが国の社会科学史上記念されるべき主要な作品だけは収録するべきではないかという意見が出されたが、この点は二四巻という一応の量的な枠の中に河上自身の作品がどれだけ盛り込みうるかをもうすこし検討したうえできめることになった。

㈡については、基本的には資料の公表乃至執筆時期順にならべることが考えられるにしても、印刷物には単行本、雑誌論文、アンケート回答その他の雑文などの区別があり、非印刷物にもノート、講義案、日記、書簡などの区別があるのだから、こうした質的区別と年代順配列という原則とを組み合せつつ具体的な編別構成を行わなければなるまい。われわれとしてはさしあたり生前の印刷物とそれ以外のものとに大きく二分し、前者については主要単行本を中心としてほぼ年代順に配列して十四巻程度におさまるかどうかを調査するとともに、後者については各種の講義案を分担検討するという作業を進めつつ、その中で漸次構成プランをかためてゆきたいと思っている。

㈢については原文の精確な再現につとめることは勿論であって、今後定本となるべきテキストの作成を期したい。歴史的な学術文献という性質上、表記の統一や現代化には慎重な態度でのぞむべきと思われる。

編集委員は大野英二（京都大学）、住谷一彦（立教大学）、山之内靖（東京外国語大学）および杉原四郎（甲南大学）の四名であるが、旧著作集の刊行にあたられた先生方、とりわけ宋川博先生や白石凡先生の御指導をあおいでゆかなければならない。白石先生は過日の会議にも出席していただいたが、今後河上の詩歌や書簡の編集については、先生に格別の御支援をお願いすることになるであろう。また河上の資料的研究の先達である天野敬太郎氏の御助言にも期待するところが大きい。今度の全集の別巻には天野氏の『河上肇文献 』の新版が収録される予定であるが、氏がいまも河上の資料調査を熱心につづけておられることが自体がわれわれにとって大きな励ましである。われわれはこうした方々の御鞭撻を得、また内藤昭子氏の周到かつ精力的な御協力を得て、筑摩書房から委託されたこの大事業の完遂にあたりたいと思っている。本会の会員の方々には今後いろいろと御世話になることであろう。全集刊行の準備がスタートするまでの経過を御報告するとともに、皆様方の御支援を心から御願いする次第である。

白石凡氏喜寿祝賀会

東京河上会の白石会長が喜寿を迎えられるにつき、東京河上会有志の発起でお祝の会が七月三十一日夜、東京赤坂「景徳鎮」で催されたので、大門が河上肇記念会を代表してお祝言上のため上京参加して来た。

白石氏も河上先生と同じ山口県人であって、中学時代からの反骨精神発揮の思出話を氏の口から承る事が出来た。又当夜出席の諸先輩の興味深い数々の話を承ってたのしい一夜であった。出席者左記の通り（順不同、敬称略）

伊藤武雄、堀江邑一、小森田一記、内田丈夫、野口務、生沼曹吾、内海厚一郎、田中某、大門英太郎

筍狩の記

例年、会員小泉仁一郎氏の好意によって、有志相集い日本一の本場筍を賞味する会を催して参りましたが、本年は京大白川会、河上肇記念会の共催として去る五月四日桂離原の小泉筍園で開催する事が出来ました。筍のしゅんと連休が重なって、特に東京からの参加者は大変な御苦労で前日から市内に宿をとって参加された様な事でありました。久し振りの会合で和気あいあい談論風発まことにたのしい一日を送る事が出来ました。特筆したいのは東京から亀山幸三、野口務、杉村乾、藻谷小一郎の珍しい顔の諸兄の参加を得た事と、本年八十九才の稲田秀爾先生が室万治氏に連れられて、御元気な様子を見せて頂いた事であります。当日の参加者は左記の通りです。

（敬称略、順不同）

亀山幸三、野口務、杉村乾、藻谷小一郎（以上東京白川会）、松田道雄、同夫人、稲田秀爾、室万治、田畑忍、名和統一、渡瀬譲、小林寛、杉崎三八郎、服部周平、毛利与一、島田弁護士夫人、塩田庄兵衛、同夫人、中村真炳、阿美京都市議、市川花園大教授、富里克己（総合資料館々長代理）、杉山幸雄、小泉民治、小泉仁一郎、大門英太郎。

私と河上肇文庫

京都府立総合資料館長　田中米一

四七年六月一日に私は館長に就任。嵯川知事から辞令をもらうと同時に、直ぐその足で「河上肇遺品展」に顔を出せということで、就任のあいさつは、まず、展示室に見える人たちと交わすことになりました。学者・文化人・各政党の議員さんや、労働者、婦人の皆さんもたくさん詰めかけて来てたいへん盛況でした。これを機縁に設置を決めた「河上肇文庫」は、私と切っても切れぬ関係になったしだいです。

河上肇記念会入会のおすすめ

この創刊号は会員の皆さんへは勿論、非会員の方でも、昭和四十七年開催の河上肇遺品展、記念講演会、記念集会にお出でいただいた方、河上肇遺品展図録をお求めいただいた方、並びに法然院の墓参にお出で下さった方にもお送り致しました。

この機会に「河上肇記念会」に御入会下さるようお願い申し上げます。

入会御希望の方は、年会費金千二百円を同封の郵便振替用紙にて送金願います。

事務局

編集後記

寒さに震えながら、集まった今年一月十九日、法然院の総会で、会報創刊が披露されてから、結局一年近く経って、やっと発刊の運びとなりました。

どうせ事務局のメンバーは皆仕事を持ちながらのこと故、夏頃まではかかるだろうと最初からサバを読んでかかってみたものの、頼りにしていたO君が夏の盛りに足にギプスをはめなければならない災厄に遭ってしまい、治癒までお手上げとなってしまいました。

創刊号から、かくの如く心元ない状態、自責の念切り、多謝。

それにつけても東京河上会があんなに几帳面に会報を続けてこられたことにあらためて感歎する次第。

さらに東京会報復刊の見込のない今日、当会報の後刷もいよいよ重大なりと自覚する次第。暖かき御叱正を切望致しております。

（S）

怠慢により大変おくれ、玉稿を頂いた方々におわび申上げます。乞次回御期待。

（O）